

シュテファン・ツワイクの

## 「心の焦燥」について

富 沢 成 美

ロマン・ロランが「彼の芸術的個性の特質は、認識せんとする欲望であり、絶間なき、決して満足することのない好奇心であり、彼を一隻の漂流するオランダ幽霊船にし、一人の情熱的な巡礼としたところの、物を見、物を認識し、一切の生を生きようとするデモーニッシュな衝動である。……彼はフロイトの重要な鍵を自分のものにした作家である。彼は魂の狩人である。」と書いている如く、シュテファン・ツワイクの生涯は、倦くことなき人間の探究とその創造的表現に捧げられたものであつた。一八八一年ウィーンでも有数の紡織工場主の長男として生れているが、その感激し易い性情と強烈な好奇心に動かされて、少年の頃から親んだ文学の世界が彼の死に至るまで人間探究の場となつた。早く十八才にして、処女詩集「銀の絃」によつて文壇に登上して以来、一九四二年にブラジルで、自らその生涯に決算を与えるまでの四十余年の間に、彼は随筆、戯曲、短篇、詩、伝記、論文の各種のジャンルに於て、驚異的な量にのぼる著作を残している。中でもその精確な史実的考証と心理的人物描写の深さに於て優れた特色をもつ伝記的作品は一般に高く評価されており、ツワイクの本領もこゝにあると云い得るであろう。しかし又、ツワイクは、数多い短篇小説も書いているが、その中でも人間の暗い衝動、とくに性的愛欲の世界を取扱つたものが少くない。これは彼の師であり、彼の父の友人であり、同じウィーン生れの心理学者ジクムント・フロイトの影響によるものであるが中でも短篇集「アモック」は最も激烈な中年の人間の愛欲を描いたものであり、作者自ら「一つの激情の書」と副題をつけている如く、又巻頭詩の中で、「己れの深淵を見出す激情のみが汝の最後の実体を燃え立たしむる。自己を完全に失える

もののみが自己を与えられているのだ。」と頷つている如く、彼の生活的価値観の一端をうかがい知ることの出来る作品である。更にまた、「カザノヴァ自伝」<sup>(2)</sup>に関する小論の中で、「カザノヴァ自伝の永遠性を決定的なものにしたのは、その形式ではなくて一人の人間の充実である。……強烈に生き生きと、集中的に一度限りに (einmalig) に生きれば生きる程、人間は一層完全に頭れる。……道徳は不滅にとつて無であり、強度 (Intensivität) をそ一切である。」とも云うように、ツワイクの愛したのは純粹に燃焼する強烈な激情であり、又強固な鉄の如き意志の力であつた。

今こゝに取上げようとする「心の焦燥」は、彼の後期の作品であり、これによつて作者は、生涯を通じて最初にして最後の長篇小説を試みたのであつた。これには序がついていて、これは作者が第二次世界大戦の始まる前年つまり一九三八年の生涯の最後のウィーン滞在期に、第一次大戦でその剛勇の故にマリア・テレサ勲賞を授けられたホーフミラーという人物からその当時に体験した数奇な出来事を聞かされ、今こゝに紹介する次第であるといつたことわり書である。ツワイクの短篇は一人称形式で書かれたものが少くないが、この長篇もやはりホーフミラーが語り手となつて所謂一人称小説 (Ichroman) の手法がなされている。このような告白形式は、一人の人間の心理風景を比較的奥の方まで展開させてくれるので、「神に祭り上げるのではなくて、人間を人間らしくすることが創造的心理学の最高法則である」<sup>(3)</sup> という作者の心理的人物構成にとつて甚だ好適な方法ではあるが、一方種々の人物の性格描写乃至は個々の事件が語り手の限られた眼によつてのみ把握され説明されてゆくのであるから、語り手自身が (これが主要人物である場合は尚更そうであるが) 作品の場から浮き上つてしまつたり、そのためにかえつて客観的迫真力を殺ぐことになり易い欠点もある。この長篇は四百頁に亘るものであるが、主人公が事件の発展と共にどのような必然性をもつて心理を展開させ行動してゆくかをみてゆくために、一応客観的な作品分析を試みることにする。

時は第一次大戦の直前、所はハンガリー国境に近いオーストリーの田舎町、こゝの守備隊に転任してきた二十五才の青年騎兵大尉ホーフミラーが数十日間

に経験する体験談である。

この町の雰囲気も軍隊の生活も単調で退屈である。ある日、ゆきつげの食料店兼喫茶店で美しい少女が注文をとりにくるのに出会う。彼女はイローナといつてこの界限きつての大金持ケーケスファールヴァの姪であるが、この少女の魅力にひきつけられて、大尉はある薬剤師の紹介で、町の外に孤立しているその屋敷に招待される。最初の訪問のとき、大尉はケーケスファールヴァの一人娘エーディットに彼女の下肢が麻痺していることを知らずにダンスの相手を申し込む。エーディットは昔は活潑な健康な少女で未来のバレリーナを夢みていたのだが五年前から突然のあしなえに罹つて以来不幸な生活を送っている十七才の少女である。イローナは定つた婚約者があるのだが、結婚する際相当の持参金を与えるという伯父との約束で、エーディットの相手をして暮している。大尉に相手を申し込まれたとき、エーディットは踊っている客達を眺めて恰も自分が踊っているような気持になつていたのでつい立ち上ろうとするが立てないので自分の不具に気がつきわつと泣きだす。すぐ後でイローナから事情を聞き知つた大尉は自分のやつた失態の重大さに気付き、狼狽して逃げ出す。このときの大尉は、専ら自分の失態が仲間や町中の人々に知れわたり、嘲笑の的になるに違いないと際限のない妄想にとられる。こゝで既に彼の性格の本質的な特徴の一つのあらわれであるところの世間体を心配する弱さが示される。彼はエーディットに謝罪の気持を伝えるために花を送る。翌日大尉のもとに彼女から花の礼と、いつでも訪ねてくれるようにという内容の手紙がとゞく。彼は早速でかけてエーディットとイローナと共に楽しいひとときを過すが、エーディットが久しぶりで明るく笑つたといつて、ケーケスファールヴァは感激する。この一家のものたちに対する自分の影響にすぐ有頂点になつた大尉は、これまでなげやりな、どうでもいゝ生活をしてきたが今はじめて自分の存在に意義を見出し、「自分を人に与える事によつて自己を高めることだ。どんな運命とも兄弟になり、どんな苦しみをも同情によつて理解し、克服することによつて自分を豊かにすることだ。」(S.72)と考え、彼の自分自身に驚く心は彼が知らずして傷け、そしてその苦しみによつて、彼に「同情の創造的な力」を教えてくれたあ

の病気の少女に対する感謝の故に震えるのである。しかし、こういう感情はロマンチックなものにすぎず、こういう同情は甘いセンチメンタルな同情にすぎないことが解る日がまもなくやつてくる。

こうして大尉は毎日のように郊外の屋敷を訪れる。彼のためにすべての便宜がとゞのえられ深い好意が示される。けれどもある日、一つの別な想念が彼を襲う。大尉は突然自分が食客としてケーケスファールヴァに金で買われているように感ずる。毎日毎日あの家の人々が自分の来訪を待っているのだという考えが大尉の義務意識を呼び起し、更に自分の来訪を彼等が当然のこのように思っているにちがいないという想像が彼の自尊心を傷け、彼等が自分を待っているにちがいない事を知りつゝ何のこともわりもせず訪問を中止する。以上の意識の背後には、その前日の晩に、ケーケスファールヴァ家に入入りしはじめて以来長く席を共にしなかつた同僚達に出合つて、彼等にひやかされたことによつて生じた仲間に対する体面上の思惑が契機となつてひそんでいるのである。この虚榮的な自己防禦が悲劇的なエーディトに対する裏切りにまで進んでゆくのである。翌日大尉が訪ねてゆくと、エーディトは高い塔のテラスで彼を待ちうけている。彼女は昨夜まんじりともしなかつたので大尉が入つてきたとき、うたたねをしているが醒めると早速彼に昨日何故来てくれなかつたのかとたずねる。大尉は適当にいい逃れようとするが、エーディトは運転手やイローナに探知させて彼が同僚達と酒場で過していたことを知つていたので、大尉の嘘は彼女の気持を傷けるばかりである。「何故本当のことを云わないのですか。不具の娘の相手なんかしているよりは健康な足で馬に乗つたり散歩したりする方が楽しいくらいは私も知っています。私はたゞあなたが下手な作り話で云いわけをしようとなさることが気に食わないのです。……私は嘘には倦き倦きしました。私は同情はまつびらです。私は嘘や厭わしい思いやりを我慢することができないのです。」という意味の言葉を彼にむかつてたてつけに投げつける。エーディトが話し終りタバコをのむというので大尉はマツチを擦つて火をつけてやろうとするが興奮して手がふるえどうしてもうまくゆかない。エーディトはそれをみて「私の馬鹿気たおしやべりのためにそんなに興奮するなんてあな

たは父のいうとおりに本当をめずらしい方なのですね。」という。(エーデイトは母に死なれ一人娘なので父親によつて甘やかされて育てられ家庭の暴君になつてゐるのだから、その長年の病苦によつて神経質になり、怒り易く、ともすれば相手を当惑させる。)このとき大尉は今迄の同情というものが、自分の考えていたほど甘いものでないことに氣附くのである。エーデイトは大尉にむかつて明瞭に同情に対する拒否を宣告したのである。同じ日にケーケスファールヴァは大尉に家庭医コンドールの口からエーデイトの病気が治るものかどうか、治るとすればいつ頃治るのか是非聞いてくれと頼まれる。この老父の態度はいつもおずおずと遠慮深い。

翌日大尉はコンドールと会いこの医者からケーケスファールヴァのこれまでの経歴が長々と語られる。この老いた大富豪は貧乏なユダヤ人の長男として生れるが、父に早く死に別れて以来、刻苦勉勵の末、種々のブローカーをやり、その冷静な計算と世間知によつて可成りな金を貯める。当時彼はカーニッツという名であつたが、当時のケーケスファールヴァの領主であつた老侯爵未亡人の遺産相続事件に介入し、その相続人である未亡人の小間使——未亡人はすべての子供に死なれ、血縁のものたちが彼女の死を遺産目当に一日も早くと望んでゐることを知つていたので、いつも献身的に無欲に仕えてくれた小間使に全財産を遺したのである——に近づき、詐欺によつて四分の一の値で彼女の全不動産を自分のものにしてしまう。彼女が彼の詐欺行為に全く氣附かず、公証人のもとで手続きが全部完了すると、彼女は更に彼に対して手数料を払いたいという。カーニッツは狼狽してその必要はないというと、彼女は感謝に充ちたまなざしで礼を述べる。このとき、これまで誰にも人間らしい対等の取扱いをうけたことがなかつた彼は強い感動におそわれる。結局カーニッツはこの小間使と結婚し、詐欺師仲間とも関係を絶ち、**Kaniz von Kekesfalva** となり幸福な家庭を営むことになる。エーデイトが生れ、愈々明るい生活となるが、夫婦は相変らず節約につとめ勤勉に働きつづける。ところが妻が重い病氣にかゝり金の力も及ばず遂に死んでしまう。カーニッツのこれまでの金に対する絶対的な信仰がくずれ、エーデイトが彼の生活の全部となり、彼女のためにあらゆる

贅沢を惜しまない。しかし、彼女が突然の足萎えになつて以来、冷静で不屈な意志と精力をもつて活動してきた彼は、心配の余り氣力が衰え、心臓病になり現在ではその生命さえ氣遣われる状態にあるという。

医者 of 長話が終つた後で、大尉はカーニッツの依頼を思い出し、それとなくエーデイトの病気についての見解をたずねる。こゝでコンドールは、医師としての独自の信念を表白する。「健康だの病気だのということからして良心をもつた恥かしからぬ医者 of 口にすべきでない二つの言葉なのだ。況や治るとか治らないとかいう言葉に於ておやだ。前世紀の最も惨憺な人間であるニーチエは不治の病人のもとでは医師たらんとしてはならぬ、という恐るべき言葉を云つている。しかしこれは、彼が我々に説明させようとして与えたすべての逆説的にして危険な言葉の中でも最も間違つた言葉だ。その逆こそ正しいのだ。私は次のように主張する。不治の病人のもとに於てこそ人は医師たるべきである。否、所謂不治の病人のもとでのみ医師としての実が示されるのだ。我々は決して不治という言葉を使つてはならない。最も絶望的なケースに際しても、私は現在の医学ではまだ治るといふ訳にはゆかない (noch-nicht-heilbar) という丈だろう。」(S 176f.f.) コンドールのこの信念は、医学生時代、彼の父が当時は不治の病であつた糖尿病にかかつて、教授に不治を宣告され、目前で死んでゆくのをどうすることもできなかつたという体験によつて生れたのだという。最後迄彼はエーデイトの病気に対して、明確な予想を避ける。治るとも治らないとも言わず、たゞ忍耐して時を待ち、可能な限り手を尽すだけだという。話しの終りに、ヴィーノットという教授が、最近新しい治療法によつて足萎えの患者を治すことに成功したという報告の記事を見たとき附け加える。

ホーフミラーが兵舎に帰つてくると途中でカーニッツが彼を待ち伏せている。この老人は娘の病気についての報告を次の日まで待ち切れなかつたのだ。大尉は同情心に動かされて、医者が病人の治療の見込みについて頑強に沈黙を守りとおしたにも拘らず、新しい治療法によつて、エーデイトの病気は、数ヶ月で治ると云つたと無責任な嘘をつく。老人は歡喜して帰宅し、早速娘に知らせせて二人とも涙を流して喜び合う。翌々日、楽しい計画に従つてお祭り氣分の

ピクニックが行われるが、大尉は自分の軽薄な嘘言が彼等にこのような影響を与えたことを後悔し、心配するどころか、自分の言葉の力に自己陶醉して、みんなと一緒に楽しむ。これまでこんなに愉快的目に会ったことはないと思ひながら、ピクニックから帰つてくると、コンドールからの電報が来ている。それには、大尉が新しい治療について口を滑らしたにちがいない。五時に酒場で待つてくれるようにとある。

酒場で医者、教授にその治療法についての精しい指示を問ひ合せたところその返事によると、エーデイトの場合には全く効果がないということが明らかとなつたと伝える。更に大尉と老人に対する同情を痛烈に批判して次のようにいう。「同情というものは、丁度モルヒネのように最初のうち丈病人にとつて有益であり、薬である。適当に配量し又中止することを知らなければ、それは致命的な毒となる。……神経がますます多くモルヒネを必要とするように感情はますます同情を必要とする。そして遂には与え得る以上に。……我々は適当に同情を制禦しなければならない。さもなければそれは、如何なる冷淡よりも悪い害をひきおこすのだ。他人を同情でもつて愚弄することにはとんでもない大きな責任がある。……他人の感情をもてあそぶのはやめてくれ。同情一いものだ。しかし二種類の同情があるのだ。その一つは、本来他人の不幸に対する切ない感動から、できるだけ速かに開放されたいと願う単なる心の焦りにすぎない気弱な、センチメンタルな同情、即ち *Mit-leiden*（共に苦しむこと）ではなくて、自分の心から他人の苦しみを遠ざけることにすぎない同情である。他の一つは、これのみが価値あるのだが、自ら何を欲するかを知り、辛抱強く、共に耐え忍びつゝ、己れの力の最後まで、否この限界を越えるまでやりとげようと決意するところの、センチメンタルでない創造的な同情である。」(S. 218ff.)

この言葉の終りの部分は、この長篇の巻頭に載せられている程で、この作品の全体を貫いているモチーフである。

さて、コンドールは更に続けて、病人の築きあげる極めて有害な空中の楼閣を破壊するのが医者、の義務であるといつて、ホーフミラーにその証人に立つよ

うに強いる。しかし彼には、エーデイト達の喜びを一撃のもとに破壊して、彼等を元の暗い状態においもどす勇気がない。結局大尉が全責任をもつという約束のもとに、エーデイトの処置は彼にまかせられる。医者も、医師としての良心の **Geduld** よりも大尉の **Ungeduld** に期待をかける。しかし病人の歡喜の状態を利用するときは、確かに最初は効果があるけれども、病人の思うように完全に治らないときは、危険な反動は避けられないということも注意する。ところが、その夜寝つかれぬ儘に読んだ千一夜物語りの中に、ある若者が路傍に横つている足萎えの老人に同情して脊負つてやつたとたんに、その老人は **Djinn** の正体を現して若者の首をしめて乗物にしてしまうので、彼は **Djinn** の命ずるとおりに走つてゆかなくてはならない……という話が出てきたとき、この **Djinn** のようにあのケーケスファールヴァが自分の運命をこの若者の運命のように支配し束縛するのだという恐怖を感じる。そして、自分の脊負つた責任が途方もなく厄介な重大なものに思われ、「この世の中で最もよくないものは悪意や残忍ではなくて、弱さによつてひきおこされるのだ。」と考え始める。

次の日大尉が訪れると、エーデイトは、やはり高い塔のテラスで待ちうけている。彼女の楽しげな様子にも拘らず、大尉が浮かない顔をしているので、少し不満をおぼえたらしく、彼に何故自分のところにいつも来てくれるのかとたずねる。彼の返答が彼女の孤独を慰めるためという意味を出なかつたので突然ヒステリーをおこしてテラスから飛びおりようとする。泣き出した彼女は部屋につれ去られるが、もう一度大尉を呼んで来させる。そのとき、エーデイトは爆発的な激情で彼を襲い狂熱的な接吻で圧倒する。始めて大尉はこの發育不全の不具の娘の中に一人の女性を認識するのである。エーデイトがいかに彼の同情を憎んでいたか——この夜はじめてイローナの口から、エーデイトが毎日口にするのは彼のことばかりであるということを知る。彼女はいつ大尉が愛の言葉語るかまちこがれて、ついにまち切れなかつたのであつた。大尉は、同情なんかではない、もつと別な感情の故に訪ねてくれるのだと思つているらしいエーデイトの氣持を、出来る丈はやく覺ましてくれとイローナに頼むが、そん



な残酷なことはできないと云われる。これまで恋の憧憬と悩みこそ最も大きい心の苦悩だと思つてきた大尉は、「自分の意に反して愛されるということ」更に「この熱烈な愛情を防ぐことができないということ」の方がもつと大きな苦痛であるとする。女が男の愛情を拒むのは天性に適つている。しかし一旦女の方から愛情を示してきた場合は、それをしりぞけるのは女の最も尊いところを侮辱することになるのだ……というのが大尉の気持であつた。彼は今やエーデイトに完全にとらえられて逃げる術もないことを嘆く。不具の娘エーデイトに対する同情の限界を知る。

町に帰つてきて、数時間同僚達につき合つた後、兵舎に来てみると、エーデイトから長い手紙がきている。——自分のような化物は人を愛する権利も人から愛される権利もない。自分は自分にとつてすら厭わしくて堪らない存在なのだ。しかしどうか大尉を愛する権利だけは与えてくれ。そしてどうぞ今までどうり訪ねてきてくれ——といった内容である。大尉はふるえる手で何度も読みかえす。二時間後に再び手紙がくる。それには、前の手紙は全部嘘だ。すぐ破棄して欲しい。明日は決して訪ねてくれるなという内容が書かれてある。彼女は彼から何の返事ももらわないので、絶望の余り幾度か自殺を図るのであるが、このときはまだ大尉は知らない。

翌日の演習の際、大尉はエーデイトの事ばかり考えていたので、へまをやつて上官に叱られ恥をさらす。同僚が彼を慰めたとき、同情がいかに人の気持を傷けるものかを悟る。大尉は、軍隊からもケーケスファールヴァ家からも逃げ出ようとする。昔の同僚で今は金持の女の夫となつている男の世話で、商船の会計の助手の仕事にありつく。軍部に辞表を書いて提出しさえすれば自由になり救われるのだと考える。早速辞表を書き、「喜ばしい気持」でそれをたたんで胸のポケットに入れようとしたとき、エーデイトの二通の手紙の存在に気附く。——彼等が待とうと泣こうと自分に何の関りがあるのだ……彼女の病気が治るか治らないかなどというヒステリックな問題全体が一体自分に何の関りがあるのだ——(5.304)と無理に自分に云いきかせるものゝ、明らかにこの辞表は、傷けられた名誉のためではなくて、実際は、ケーケスファールヴァ家

の人々から、自分の偽瞞から、自分の責任からの逃亡のためのものであることを知っていたので、又、コンドールとの約束を思い出し、さすがにこの医者に黙つて脱出する訳にもゆかず、別れの挨拶をするためにその家を訪ねる。大尉はこの家にくる前までは適当にいいのがれようとしていたけれども、いざコンドールと暗闇の中で対坐すると、エーデイトの突然の愛の告白、自分の驚愕、狼狽、不安などについて打ち開けてしまう。医者は大尉の逃亡計画を喝破してそれはエーデイトに対する殺人行為になると断言する。更に彼は、大尉が何故エーデイトの愛を恐れるのかという本当の理由を心理学的洞察でもつて解明する。大尉をエーデイトから遠ざけたものは、彼女の病気ではなくて、もし彼がエーデイトと恋愛関係に入つた場合、第三者がそれを知つたら嘲笑するだろうという不安であるという。そのとき大尉はコンドールが自分の心臓に針を突き刺したように感ずる。コンドールによると、大尉は、ケーケスファールヴァの云う如き「素晴らしい善良な人間」ではなくて、「感情の不安定と心の焦燥のために放置しておくことのできない仲間」である。大尉は、自分の逃亡がエーデイトの死を意味するという絶望的な理由のために、辞職する決意を放棄する。かくて、スイスの療養所に旅立つまでの数日の間だけエーデイトに愛の希望をいだかせておけばよいという約束で大尉は再びケーケスファールヴァの家を訪ねることになる。

三日間は無事にすぎる。といつても、大尉は、彼がエーデイトを嫌いなのではないという態度丈を懸命になつて保持するが、積極的な愛情の表現は何一つしようとしなない。大尉の関心事は、一刻も早くこの義務的な芝居から開放されたいという願ひばかりであつた。逆にエーデイトの関心事といへば、もはや自分の足萎が治るか治らないかという問題ではなく、大尉の自分に対する感情の如何である。彼の心が冷い限り、スイスへの療養の旅も何にならう。彼女は突然出発を拒否する。しかし、娘の絶望を見るにしのびない父親の必死の歎願に動かされて、——このとき父親は娘が何回か自殺を試みた事を知らせる——遂に大尉はエーデイトが元のように健康な体になつたら結婚すると約束する。勿論彼はエーデイトが歩けるようになる筈がないと確信していたからであり、彼

女が旅にできれば、自分は再び自由になるのだと考えているからである。翌日、大尉は酒の力を借りてケーケスファールヴァ家を訪れると、エーデイトはじめ一家全体が明るい幸福の光に包まれて大尉を歓迎する。大尉は容易にこういう雰囲気に支配され、みんなの感謝のまなざしに囲まれていい気分になる。エーデイトは大尉の指にエンゲージ・リングをはめ、彼もはじめて自発的な衝動にかられて彼女の唇に接吻する。かくして婚約が成立するが、帰り際に予期しなかつた事件がおこる。玄関の扉からエーデイトが松葉杖を用いず自力で大尉に向つて必死の力を出して操り人形のように歩きはじめるのである。奇蹟が生じたのである。ところがもう一步で大尉が自分を抱きとめてくれると思つた彼女は力尽きて大尉の足下に倒れる。大尉は彼女の方に一步も近よるでもなく抱きとめようとするのでもなかつたが、もつと残酷なことには、彼女が倒れた瞬間大尉はぎよつとして後に退くのである。エーデイトは泣きながらみんなに運び去られる。大尉はエーデイトに慰めの言葉をかけてやらなければならないと思うが、彼女の絶望的な怒りの眼を怖れて夢中で逃げ去る。大尉の頭の中は混乱し、さまざまな妄想が浮ぶが、それらはすべて自分一個人の利己的な顧慮にすぎず、エーデイトやその父のことについては何の同情も感じていない。彼が夢遊病者のようになって町の酒場に入ると、同僚達が、最初に大尉をケーケスファールヴァに紹介してくれた薬屋の口からすでに大尉とエーデイトとの婚約のことを聞知つていたのでそれは本当かとたずねる。大尉は彼等の嘲罵から身を守るために、そんなことは断じてないと嘘をつく。彼等はたやすく大尉の言葉を信じる。大尉が金のために不具の娘に身売りするなどという恥かしいことをする筈がないというのが彼等の言い分であつた。しかし、こういう嘘はすぐ発覚することに気附いた大尉は自殺を図るが、連隊長のとりはからいで中止する。彼はコンドールに手紙を書いて、すべてを説明し、もしエーデイトさえ自分の弱点を許しさえすれば、病気が治るまいと治ろうと生涯を共にしたいと述べる。しかし偶然がわざわざいして大尉の気持を知る前に大尉の嘘がエーデイトの耳に入り、彼女は塔からとびおりて死ぬ。丁度同じ日にオーストリーの皇太子夫妻が暗殺され、戦争がはじまる。大尉はエーデイトの死を忘れるために剛勇を發揮

する。戦争が終り帰つてみると、ケーケスファールヴァは娘の死後数日して死んでしまい、同僚達も戦死したり或いは昔の事など忘れてしまつている。彼は新たに生きる勇気を獲得するが、ある日コンドール夫妻に会つて、良心が知る限り、罪は忘れ得るものでない事を知る。こゝで物語りは終つている。

以上の概略によつても理解されるように、この作品のイデーは、「同情」という感情の三つの様相にある。その一つは、ホーフミラーによつて示される「他人の不幸に対する切ない感動からできる丈速かに開放されたいと願う単なる心の焦りにすぎない気弱でセンチメンタルな同情、即ち **Mit-leiden** ではなくて自分の心から他人の苦しみを遠ざけることにすぎない同情」であり、第二のそれは、コンドールによつて示される「自ら何を為さんと欲するかを知り、共に苦しむつゝ、辛抱強く自分の力の最後まで、否、この限界を越えるまでやりぬこうと決意している同情」であり、最後のそれは、ケーケスファールヴァによつて示される同情で、前二者の中間に位するものであるが、真に **Mit-leiden** ではあるが、同時に創造的な忍耐も知らない同情である。コンドールに云わせると、ケーケスファールヴァは、「限々まで不幸に覆われているこの世界に彼の子供の不幸しかないように思つている」老人であるが、盲目的であるとはいへ、それ丈尚一層子供に対する愛情が純粹でしかも強烈である訳で、それ故真に **Mit-leiden** であり得るのである。しかし彼の同情は、「アモック」の世界に於ける「憑依 (**Besessenheit**)」と通ずるもので、その特色は「**Ungeduld**」にある。ところがこの同情は自ら何を為さんと欲するかを知らず、いたずらに苦しむのみである。遂に、彼は己れの同情の故に、つまり強烈な自分の愛情の犠牲となる。彼の幸福のすべては娘の幸福の如何にかゝつており、娘の幸福を願うことが、彼の生存の意味のすべてであるからである。ホーフミラーの同情が、彼の卑小なエゴイズムの一変形である如く、ケーケスファールヴァのそれは、彼の全存在を賭けたものだつたからである。一方ホーフミラーは、生活上の信念も、全身的な強い情熱も持たない凡庸で臆病な事なかれ主義者であり、ひたすら身の無事にのみ汲々として、その弱さの故に、相手をも自分をも傷けてゆく。彼の弱さは、自分の心に重い荷を背負えない弱さである。彼は愛情か

らも責任からも逃亡しようと企てる。自殺の決意も、結局卑怯な逃亡にほかならなかつた。最も高い意味での同情は、医師コンドールによつて生活的に実践される。彼はある女の目を治療して失敗し、盲目になつたその女と結婚し、貧民窟に居を構えて全身を貧しい病人達のために捧げている。人類愛の理想像であるが、これは、正確な論理と、不屈の実行力によつて創造的な同情のイデオの担い手となつていたのである。

更に理解すべきことは、この作品に表現せられている同情の三様相は、その各々に於て三つの愛情の類型と夫々対応関係を有していることである。同情の質を規定するものは愛情の質にほかならない。従つて、最も問題となるホーフミラーのエーデイトに対する感情を今一度分析してみることにする。

この作品の文芸的悲劇性は、ホーフミラーによつて表現される「センチメンタル」な同情が、エーデイトを、更に又ケーケースファールヴァをも絶望的な死に追い込むというモチーフにある。外的な運命の力でもなく——尤も偶然は別であるが——積極的な暗い悪意でもない、一人の善良な気弱な人間の同情が、眞の同情が持つ如き創造的な力をもたないのみならず、かえつて、相手に対して致命的な破壊力となる点にある。ホーフミラーの不安定な想念は、エーデイトに対する感情の不安定を説明してくれる。コンドールからエーデイトの足萎えが気に入らないのかと問われたとき、ホーフミラーは直ちに「違います」と答え、「私を彼女にあんなにひきつけたのは、ほかならぬあの頼りなさ、無力さであつた。又、私が、恋するものがもつあのやさしい感情に近い感情すら、ときおり懐いたのは、彼女の苦しみ、彼女の孤独、不具などが私の心をあんなに動かしたからである。」(S, 321)と説明している。彼がエーデイトに対する気持を告白しているのは、作品全体を通じて只この箇所のみである。のみならず、この告白すら余り明白な感情を表白しているとはいえない。しかも、イローナの間にも、決して恋してなんかいない、と答えている。エーデイトの恋を、いつも「馬鹿々々しい恋」といふ、「意に反して愛されること」と云つてみたり、それでも彼は彼女との結婚を決意したときには、「私の人生には、まだ一つの価値があります。それは、私があざむいたのは、他の人々であつて、

彼女ではないということを彼女に実証することです。」(S,410)と書いてもいる。従つて、彼は、エーデイトに対して、弱いながらもある程度の愛情はいただいていたのであり、彼女の愛から彼をひきはなそうとしたのは、否応なしに負わされた責任感情の重圧であり、束縛感であつた。けれども、これは、意識の表面に現れた、いわば本能的な自己購著であつて、その意識下に潜んでいたのは、軍人仲間をはじめ、世の中の人々に対する自己防衛、即ち、世間体をおもんばかるエゴイズムであつた。同情を拒否したエーデイトとは逆に、ケーケスファールヴァは、必死の歎願によつて、ホーフミラーの同情を請うのでありホーフミラーはいつも打負かされて、守れない約束をし、結局裏切るといふ破目におちいる。エゴイズムが傷かない限りには於ての同情は、エゴイズムが傷くや否や「呪わしい」同情に変わるのは当然であり、畢竟、エゴイステイックな愛情はエゴイステイックな同情に通ずるのである。

ところで、作者ツワイクが、何故、同情のイデーに関心をもつたのであるかその生活に於ける問題性を探つてみなければならない。

ツワイクの伝記作者ハンス・アレンスのいう如く、「友情の天才」であり、「旅行の天才」であつた彼は、学生時代からアメリカ、アフリカ、アジアの各地を旅行し、歐洲でも到る所を遍歴し、その土地々々に友人をつくり、有名人のみならず、ごくつまならない人々ともよく親交を結んだといわれる。本来情熱的な **Menschenfreund** であり、人間の一切の欲望をその運命として肯定し、その純粹な燃焼を讚美する一種の **Humanist** であつた彼が、一九三七年五月二日、ナポリから彼の妻フリーデリーケに宛てた手紙の中で、「私はうぬぼれている訳ではないが、私なしで居ることが君にとつて、かなり辛いことは知つている。しかし、君はそんなに多くの人々を失つてゐるわけではない。私はもう昔の儘の私ではない。人間嫌いの、只もう仕事だけを楽しむ、そして、すつかり自分の中にひきこもつた人間になつてしまつた。私が、どんなに多くの人々と袂別したか君も知つてゐる通りだ。私は又、自分の周囲が、静かになり空虚になつてゐるのは、私のせいなのだ、ということも知つてゐる。あのドイツからやつてきた打撃は、我々みんなに、君が想像しているより以上に深く突

き当つたのだ。」と書いている。一体何が彼をしてこのような孤独な手紙を書かせたのだろうか。更に、「友人達が私にひどい仕打をしても、私は友情をもちつけて、決してこの内面的な義務から逃れようとしなないことは、君も知っているだろう。頼むから、君が私を失つたなどとは決して考えないでくれ。そして、あの人々の事は、気にしないで欲しい。彼等が私を批難するのには、彼等にも一部の理があるのだ。彼等は、私が近年、コンプレックスのために、ザルツブルクでどんな苦痛を味つたか知らないのだ。」

一九三三年ナチ政権が完全独裁を掌握して以来、その民族政策は年と共に露骨になつてくるが、半ユダヤ人であつたツワイクも「罪なくして罪におち入る」ような体験をしたにちがいない。昔の友人達の多くのものが彼と別れたのも、恐らく、その辺の事情によるものと思われる。一九三七年、ウィーンの家が官憲の手によつて、家宅搜索まで行われているが、これがツワイクを故国から去らせる動機となる。フリーデリーケの手記によると、この事件は、彼の誇りを非常に傷けたので、彼女が帝室の高官から個人的に、特別な宥恕を得る措置をとつたが可成りその効果があつたにも拘らず、彼は、彼女に対してばかり腹を立てた、ということである。しかし、フリーデリーケは、彼の怒つた本当の気持は分らなかつたのではないかと疑われる。彼女の歎願そのものが、彼の気持を傷けたのではなかつたらうか。一九三七年二月二八日ロンドンからの手紙の中で、「私はこゝで人に隠れて生活している。私が居るといふことは、まだ誰も知らない。私は、私の本質的な仕事を完成するために、この本から手を引きたい。」と書いているが、フリーデリーケの註によると、「この本」とは当時執筆中の「マゼラン」であり、「本質的な仕事」とは、ほかならぬ「心の焦燥」である。

こゝで再び作品に目を向ける。

ホーフミラーがエーデイトからエンゲージングを指にはめられ、突然の衝動にかられて、はじめて彼女の唇に接吻し、二人の気持が相当に投合していたにも拘らず、エーデイトが、いじらしくも、ホーフミラーへの愛情の力を実証するあの感動的な奇蹟を最も非人間的な残酷さで裏切るというのは、彼のエゴ

イズムをどんなに支配的だと考えても、この行動には、彼の性格描写からみても、場の情景から云つても、必然性を認めるのは困難である。又、このことがエーデイトに対して決定的な打撃にならなかつたことを一応承認すれば、翌日彼女は嬉しげに、スイスの療養所への旅支度をしているのだから、「偶然」さえ起らなければ、ホーフミラーに遂に生じた、エーデイトとの生活への決意によつて、悲劇は避けられた筈であつた。決定的な瞬間に何故「偶然」をもつてこなければならぬか。エーデイトは、彼女にとつて此の上ない幸福な、ホーフミラーの意思を知らずに、全く救いのない死に追い込まれている。作者のこのような自然とは云えない作品構成が一体どこからくるか。云うまでもなく、安っぽい同情の恐るべき逆効果のモチーフが作者の意図であつたからである。しかし、作者は何故とくにそういう発想をしたのであろうか、これが問題でなければならぬ。更に、ホーフミラーがエーデイトと婚約し、それをとり返しのつかない災厄だと思ひ、様々な不安な妄想に襲われるが、自分の伯母がこのことを知れば、ケーケスファールヴァが昔のカーニツツで、エーデイトは「半ユダヤ人」であることを探り出さない筈はない。伯母にとつては「世の中で、ユダヤ人と親類になるくらい恐ろしいことはない」のだと心配したりする。

ユダヤ人に対する世人の偏見は、永い歴史を有しているが、一九二〇年、ナチがその党綱領で、ユダヤ人の市民権剥脱を公言して以来、その民族政策的宣伝は、年と共に激しくなり、ナチが政権を掌握してからは、オーストリーに対する武力圧迫がはじまり、一九三八年には、これを武力によつて併合している。半ユダヤ人であるツワイクが、こういう時勢の中で、どのような屈辱を感じながら生きなければならなかつたか容易に想像できる。ツワイクのもつユダヤの血のために、これまでの友人達が彼に対して不自然な態度をとりはじめたであろうことは上述の手紙によつても察知される。故国を追われて、ロンドンアメリカ、ブラジルと亡命の旅にのぼるのはこの頃である。

ツワイクの追放体験こそ、この長篇のモチーフの契機となつたのだといつても過言ではあるまい。ユダヤ人である事を余りに意識していたに違いない彼が単なる思いつきで、ケーケスファールヴァにユダヤ人の面貌を与えたとは思わ



れない。作者は、ホーフミラーがケーケスファールヴァの経歴を知ったとき、「あのたれ下つたまぶたの奥の、ヘントウ形の、メランコリックな眼は、ハンガリーの貴族の眼ではなくて、ユダヤ人の千年もの悲劇的な戦いによって鋭くなり、同時に疲弊したまなざしなのだ、ということはどうして見逃していたのだろうか。」(S1.72)と考えさせている。今、自ら宿命的な不幸と屈辱を体験したツワイクが、甘い同情を断乎として拒否し、同時に、最後まで、ケーケスファールヴァ父娘を救う気になれなかつたものと思われる。コンドールの説く高次の同情も、新たな意味を獲得するであろう。

註(1) 短篇集「アモック」の仏訳本の序

(2) Die neue Rundschau 1928, 1

(3) Marie Antoinetteの後序

使用テキスト及び文献

Stefan Zweig ; Ungeduld des Herzens 1949

(Bermann-Fischer-Verlag)

Stefan Zweig/Friderike Zweig ; Briefwechsel

Hans Arens: Stefan Zweig, Leben und Werke